

「株式会社大産 美里営業所」



# 昨日より今日、 今日より明日 無事故・無違反を貫く 安全輸送は自分への挑戦

株式会社大産  
乗務員リーダー

## 田沼保泉氏

自動車や建機、家電のさまざまな部位に使用されるシール材などの輸送を担う、株式会社大産さまの美里営業所。お客さまへ信頼を届ける乗務員リーダーの田沼保泉氏のモットーは、「小さなことでも隠し事はしない、うそはいわない」こと。その単純明快なポリシーが、輸送において、わずかな事故の要因が入り込むスキを遮断している。シンプルな約束事に表れる、田沼氏のひたむきな人柄に迫った。

ひとカゴ400kgの重量を支える  
仕事への責任感と誇り

シール材の入ったパレットを、荷崩れしないようにストレッチフィルムで巻き、車両に積み込んだら、ラッシングベルトで締めつけていく。一つひとつ確かめるように、確実に作業をこなすその動きには一切ムダがない。田沼氏はパレットやカゴ車など、さまざまな荷姿の積み荷を扱うが、中でも荷受先での積み込みは、一瞬たりとも気を緩めることのできない作業だという。

田沼氏が口火を切る。

「荷台で待ち受ける私に、フォークマンが次々とカゴ車を送り出していきます。キャスターの付いたカゴ車は、一つの重量が300kgから400kg。それが2段積みになって、荷台の上を転がりながら向かってくるのを受け止め、積み込んでいきます。フォークマンとの呼吸が合わないと、たつぷりと荷重のかかったキャスターに足を巻き込まれる危険性があります。現場では騒音で声がかき消されることも多いですから、大きな身振り手振りも総動員しての真剣勝負です」



めには、どんな場合にも隠し事はしないこと、うそはいわないことが大切だと思うのです」

**皆と同じ目線から  
リーダーシップを發揮し  
同じ目標を持った  
仲間を増やす**

普段は、全員が顔を合わせる機会の少ない輸送の現場。そこで同営業所では、毎週土曜日にミーティングと合同作業の時間を設

け、コミュニケーションを深めているという。

大内氏が説明する。

「物流の仕事というのは、個々に独立して動いているのではなく、すべてがつながって初めて評価をいただけるものです。自分さえレベルが高まればよい、というわけにはいきません。そこで、ミーティングでその週の動きや、振り返りの報告をおこなった後で、全員が一つの作業に臨み、ノウハウを共有する活動を推進しています。そ

のとき、初めてほかの乗務員が輸送している積み荷の内容を知ったり、『こう積んだ方がより安全に運べるのではないか』と意見の交換が始まったり、会話が熱を帯びていくのを頼もしく感じていきます。この雰囲気をつくって広めてくれているのも田沼なのです」

ベテラン乗務員としてだけでなく、リーダーの役割への期待にも頼もしくこたえる田沼氏。その視線の先にあるものは、全員のスキルアップにほかならない。

「私のこれまでの経験を伝える一方で、仲間から話を聞いて、自身の勉強になることがたくさんあります。乗務員の仕事は、誰かと競ったり先を争ったりするものではないですね。競う相手がいるとすれば、昨日の自分です。安全運転で無事に帰庫できた昨日の自分に負けないように、今日をがんばる。そしてまた、明日もがんばる。毎日、確実に、お預かりした荷物をお届けする。これに尽きるのです。そんな同じ目標を持つ仲間が、一人でも増えていくことが私の喜びです」

田沼氏が胸に秘めた熱き思いは、乗務員仲間、そしてお客さまへと、確実に届いているようだ。

Corporate Profile



株式会社大産 美里営業所

- 所在地：埼玉県児玉郡美里町甘粕1285-5
- 従業員数：37名(内 乗務員30名)
- 車両台数：38台(大型ウイング/中型ウイング)
- 主な業務：自動車、建機、家電等の部品の保管・輸送



株式会社大産  
専務取締役  
**大内信人氏**

万が一ミスをしたとしても、大切なのは正直にいうこと。  
自分にも人にも正直な仕事の積み重ねが、信頼につながるのです。

経験を積み重ねれば確実にこなうのが難しいという荷積み作業。その難しさを、身をもって知る専務取締役の大内信人氏が語る。

「私も何度か作業したことがありますが、とても田沼のようにはいきません。力だけでなく、特有のカンやコツ、タイミングが必要なのです」

1回の積み込みにかかる時間は30分。荷積み作業を終えた田沼氏は、慎重を極めた運転で納品先へと向かい、荷降ろしを済ませる。この輸送業務が1日に2回。注目すべきは、10年間の乗務キャリアを通して、無事故・無違反を貫いている点だ。

「私は、何事も隅々まで確認して進める性分です。小心者なのかもしれないませんが、小心者は事故を起こさないんです」

照れくさそうに話す田沼氏の顔がほころぶ。その笑顔に、仕事に対する責任感と誇りがにじむ。

**より一層、安全を  
徹底するため  
納品先にも積極的に  
アイデアを提案**

納品先は、必ずしも荷降ろしに適した場所であるとは限らない。



敷地が狭かったり、死角があったりする場合、状況を読み取って、その場その場で適切に判断することが求められる。どんな場合にも田沼氏が欠かさないのは、目視での確認をおこなうことだという。

「経験に頼って確認作業を怠ってはダメです。トラックから降りて、軒先に当たらないか、地面の凸凹はどうか、通路に障害物が置かれていないか、必ずチェックしてから着車します。荷物をお預かりしたら、無事にお客さまにお届けするまで、すべて乗務員の責任なのです」

そう語る田沼氏のプロフェッショナルとしての姿勢に学ぶことが多いと、大内氏はいう。

「組織上は私が上司ですが、私

にプロとして仕事をしていただけです。長年の経験が培った言葉には説得力がありますし、仕事仲間に対してもお客さまに対してでも真摯で正直な点は群を抜いています。だからこそ、『田沼さんなら大丈夫だ。お願いするよ』というお客さまの声を多くいただくのだと思います」

こんなことがあったと、田沼氏が言葉を引き継ぐ。

「納品先の工場内で、見通しの悪い場所があったのです。リーチフォークを走らせる私の前を、工場の従業員の方が早足で横切ったり、急いでいるときはつい飛び出したり…。こちらはいつも低速で

走らせていますが、接触を回避したときに、リーチフォークに載せた荷物が倒れそうになることがありました。そこで、カーブミラーの設置を提案したのです」

このアイデアはすぐに採用され、以来、工場内にスムーズな流れが生まれたという。また、荷主企業から、初めて扱う荷物の梱包の仕方を相談されることも多いという。田沼氏が続ける。

「大切なのは、荷主企業の担当の方と、何でも話せる。関係を築いておくことだと思います。最後は、それが自分自身の仕事のしやすさに跳ね返ってきます。そのた

